
幽霊でも女の子

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊でも女の子

【Nコード】

N7658D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

部屋を借りに来たとにかく性格の悪い若者政之。不動産屋の親父に嫌われた末に安く借りた部屋では誰かが。幽霊もののコメディーです。

第一章

幽霊でも女の子

「夏涼しくて冬は暖かい」

それがこの部屋の売り込みであつた。

「いい条件でしょう」

「まあね」

三田政之は不動産屋の太つた親父の話を少しドライに聞いていた。

「売り込み言葉の定番だね」

「お兄さん随分とすれてるね」

「だっていつも聞く言葉だから」

そのすれた調子でまた言うのだった。

「そうじゃないの？おじさんだってその言葉今まで数えきれない位言つてるでしょ」

「よくわかつてるね、本当に」

「親戚に不動産屋さんいるしね」

そうした理由からであつた。彼がこうして不動産の商売に対して醒めているのは。そのクールな調子は全く変わる様子がなかった。

「それでなんだ」

「その人には部屋を紹介してもらわなかったのかい？」

「この前喧嘩してね」

無然として親父に答える。茶色の長い髪の下にある細い目が随分と険しくなる。不機嫌であるのがその目を見ただけでわかる。

「それで御前には部屋なんか紹介するかって言われたんだ」

「そうだったのかい」

「また心が狭くてね」

そう言つて親戚を批判しだした。あまり褒められたことではないが彼には自覚がない。

「自分の娘とデートしたただけでさ」

「デートしただけでそんなに怒るかね」

「ついでに結婚していいかって冗談で言ったら」

「そりゃ悪いに決まってるな」

親父はそこまで聞いて納得した。当たり前だこの馬鹿と顔で政之に言っていた。

「冗談でも言うものじゃない」

「ちえっ、そうだったのかよ」

「それでわしのところに來たのか」

「ああ。いい部屋ある？」

今度は横柄な態度で親父に尋ねた。

「あつたら教えてよ。その夏涼しくて暖かい部屋」

これだけではなくさらに注文をつける。

「風呂トイレ台所付きね」

「それは今時当たり前だろ？」

「それで月二万」

「待てこら坊主」

今の月二万には親父も流石に憤慨した。

「今時そんな家賃の部屋があるか」

「敷金礼金もなしでね」

「御前さんはわしをからかっているのか！？そんな部屋が……いや」

「何だ、あるじゃない」

親父が視線を左に泳がせたのを見てすぐに察した。性格はかなり問題があるが頭と勘はいいことがわかる。あまりいい方向には使っていないとも。

「だったらさ。何処なんだよ」

「ああ、そこでいいんだな」

「昔に何があっても平気さ」

彼は己の図太さを自覚して言うのだった。

「だったら教えてよ」

「わかった。これだ」

そう言つてあるアパートの部屋を紹介してきた。

「ここに入れ。いいな」

「じゃあ後は引越すだけだね」

「そのかわり後で文句を言つても知らんぞ」

親父は険しい顔で政之に忠告した。

「何があつてもな。ただし出て行くのは勝手にしろ」

「ヤクザと同居でも平気さ」

しかし政之はそう言われても全然平気であつた。まるで蛙の面に小便であつた。本当に態度が全く変わりはしないのだ。

「そのヤクザ屋さんノイローゼにして出て行つてもらふしね」

「ヤクザだと思ふのかい」

「そうじゃないのかい？」

政之は親父の剣呑な口調からそう考えていた。しかしそれはどうやら違ふようであつた。

「まあそれは行つてからのお楽しみだね」

「また随分と意地悪いな、あんたは」

「御前さんの性格に比べればまだよ」

親父はこう政之に言い返した。「冗談ではないといったふうであつた。

「全く。御前さんみたいな奴ははじめてだ」

「タフだとは言われるね」

「いいふうを考えるんじゃないよ、あんたは図太いつていうんだ」

この親父も結構な性格として周囲から評判であつたが政之はそれ以上であつたのだつた。

「そんなあんたなら絶対大丈夫だね」

「その部屋でもか」

「というかあれだろ」

また政之を剣呑な目で見てきて言つてきた。

「あんたは戦場でも死体が側に転がっていても平気だろ」

「銃弾が来ないところで寝て死体はどうかによけておけばいいさ」
彼はその嫌味に満ちた問いに平然として答えた。

「それだけじゃないか」

「だろうな。じゃあほれ」

ここまで話したうえで鍵を出してきた。

「それでこれが地図だ」

「駅からすぐ側なんだな」

「そうさ、駐車場もある」

「いたせりつくせりな部屋だな、何か」

政之はさらに満足した。本当に全然平気である。

「これで月二万かよ」

「普通はここで幾ら何でもおかしいだろうって思っもんなんだがな」

「そのおかしいことに平気ならそれでいいんだよ」

政之はまた平然として親父に言葉を返すのであった。

「あんたには悪いけれどな」

「ふん、じゃあとつとで行っちまいな」

親父はこう言い捨てて彼を行かせた。

「家賃は毎月こつちに送るだけでいいからな」

「手渡しじゃなくてもいいのか」

「あんたの顔は二度と見たくないんだよ」

ここまで嫌いな相手に貸す部屋だ。やはり絶対に何かがあるのであるがそれでも政之は平気な顔をしたままであった。しかもこれが虚栄ではないから凄いのである。

「わかったな。じゃあさつさで行っちまいな」

「わかったよ。まあこつちにはちよくちよく来させてもらっぜ」

「こつちとしてはそんな気遣いは一切不要なんだがね」

「気遣いじゃないさ。ここのお茶とお菓子が美味いからさ」

今出されているお茶とお茶菓子について述べてきた。

「随分いいものを出してるね。幾ら何でも部屋を貸している人間が来たらこれ位出してくれるよな」

「あんただけは特別に出さないでいたいがね」

そうは言っても出さないわけにはいかない。彼も商売人だ。最低のルールは弁えているのである。かなり不快なものを感じているにしてもだ。

「その時はな。ただ何もなくて来るんじゃないよ」

「理由は作るものさ」

また悪びれずに言う政之だった。

「それじゃあそういうことで」

「母さん塩だ塩」

政之が席を立ったところで親父は店の奥に顔を向けて叫んだ。

「こんな性格の悪い奴ははじめて見た。縁起でもない」

「それはいいことで」

政之はその親父を振り返りもせずにくう言うのであった。彼にしてみれば振り返って見るまでもなかった。どんな顔をしているのか手に取るようにわかっていたからだ。何はともあれこれで彼は格安の価格で別格の部屋を手に入れることができたのであった。

第二章

晴れてその部屋に入った。見れば。

「へえ、これはかなり」

その部屋はマンションの一階であつた。しかも本当に駅からすぐ側で周りには店も充実している。しかも部屋は親父の言葉通り立派な風呂もトイレも台所も揃っている。3LDKの立派な部屋であつた。

「家具はこつちでいいですね」

「ええ、どうぞ」

引越し屋にそう応える。彼等はそれぞれの家具を相応しい場所に置いていつていた。こうして忽ちのうちに部屋は人が住むものになつたのであつた。

あらためて見るといい部屋だつた。しかもクーラーももう備え付けられている。なおかつそれはヒーターにもなるものであつた。暮らすには十二分な場所であると言えた。

「何かあるようだけれどな」

政之は部屋の端に置かれたベッドの上に腰掛けて呟いた。だがそれでも平気な顔なのは親父と話をした時も変わりはないのであつた。

「さて、それは何かな」

「今度来たのは貴方ね」

そう呟いたところで何処からか声がした。

「貴方がこの部屋に住むのね」

「誰かわからないけれどそうさ」

その声に対して答えた。答えながらこの声がその二万円の根拠なのだと察していた。聞いてみれば若い女の声だつた。しかもかなり綺麗な声であつた。

「それがどうかしたのかい？」

「そう、貴方が」

女の声はそれを聞いて頷いたようであつた。政之は声が納得したのを確認してからまた言うのであつた。

「同居人がいるとは聞いていないんだがね」

「私はずっとここににいるから」

声は今度はこう答えてきた。

「だから同居人ではないわ」

「意味が通じないんだけどな、それって」

政之はまた言い返した。やはり平気な顔で。

「同居人じゃなかったらあんたは一体何なんだ」

「ここににいる者よ」

これが彼女の返答であつた。

「この部屋に」

「じゃあ同居人じゃないか」

政之はまたしても言い返す。ここでも言葉の調子も顔も変わらない。
い。

「どう違うんだ」

「だって私はここから離れらることはないから」

「引き籠もりかい？よくないぜ」

「それでもないわ」

向こうもまた政之の言葉を否定してきた。

「悪いけれどね」

「じゃああんたは一体何なんだ？」

少し挑発気味に女の声に問うた。

「そもそも姿も見せないし。一体何者なんだ」

「姿はあるわ」

「じゃあ見せてみてくれよ」

また少し挑発を含んで言うのだった。

「あんたのその姿ってやつをよ」

「わかったわ。それじゃあ」

それを受けてようやく姿を現わしてきた。しかもテレビから姿を這い出してきて。黒く長い髪を垂らした細身の女だった。白いブラウスとスカートを身に着けている。肌はあくまで白く雪と同じ色になっている。顔は少し細くそれで目鼻立ちはかなり整っている。特にその目が印象的で一本調子の眉の下にカマボコを寝かしたような形できらきらと光る黒目がちの目であった。それがかなり奇麗であった。

「何だ。何かと思えば」

政之はその彼女を見ても平気な顔で言うのだった。

「美人じゃないか。どんな化け物かって思ったら」

「私を見ても平気なの？」

「何がだい？」

彼女が怪訝な顔で問うてきてもやはり平気であった。

「私を見ても。普通は」

「ああ、あんた幽霊だろ」

またしても平気な顔で彼女に言ってきた。

「そういうことだろ？わかってるさ」

「わかってるのならどうして平気なのよ、そんなに」

「普通は察しがつくものさ」

政之は平然として答えた。

「テレビから出て来た時点だな」

「何となく演出狙ったのよ」

幽霊はむすつとした顔で政之に答えた。

「全然驚かないし」

「こんなので驚く奴もいないしな、今頃」

大抵は驚くが彼は別なのだった。

「少なくとも俺はな。そうだよ」

「随分肝っ玉が太いのね」

「それについては自信があるさ」

政之はまた平然とした顔で答えてみせた。

「学校にいた暴力教師をマスコミに通報して社会的に抹殺してやったこともあるしな」

「強いわね」

これには幽霊も驚いた。政之の神経の太さにだ。

「少なくとも敵に回したら怖いタイプね」

「褒めてくれて悪いな。しかし一つ聞きたいんだけどな」

「一つって？」

「あんたの名前だよ」

政之は幽霊の顔を見て問うのだった。

「何ていうんだ？聞いておきたいんだけどさ、これからずっと一緒に住むんだしな」

「幽霊に名前聞くの？」

「だから一緒に住むんだろ」

そこをまた言う。

「それだつたら当然じゃないか。そうだろう？」

「こんな人はじめてだわ」

幽霊は自分の名前を聞く政之に対して呆れていた。今までこんなことはなかったからだ。少なくとも彼女がはじめて会ったタイプである。

第三章

「俺は三田政之っていうんだ」

まずは政之が名乗った。

「仕事は薬剤師」

「変な薬作っていないでしょうね」

幽霊は政之の仕事を聞いて即座にこう問うた。

「少なくとも合法的なのしか作っていないぜ」

「本当!？」

「法律に触れたらどうしようもないだろ」

彼は言う。少なくとも法律に触れることはしていないというのだ。

「違うか？」

「それだつたらまあいいけれど。けれど」

幽霊はまだ言いたかったが止めた。これだけ図太い政之なら本当に何かありそうだったがそれを聞くのが何か怖くなったからである。

「それで私の名前よね」

「そうそう、それぞれ」

政之は本題に入って笑みを浮かべる。ベッドに座って話を聞く。

「何ていうの？名前」

「加藤明日香っていうの」

「へえ、いい名前だな」

政之は幽霊の名前を聞いてすぐにこう応えてきた。

「似合ってるよ」

「有り難う」

「それで何で幽霊になつてんだ？」

政之が次に聞いたのはそれであった。

「事故かい？病気かい？」

「事故なのよ」

明日香は憮然とした顔で答えた。

「この部屋でガス爆発起こしちゃってね」

「それはまた災難だったな」

「五年前にね。念願の一人暮らしがやっと実現したと思ったらよ」
「そうだったのか」

政之はそれを聞いて少し同情したが顔には出さなかった。そんな
に人のいい彼ではないのだ。

「それはまた」

「それからずっとここにいるのよ」

「彼氏は？」

「いるわけないでしょ」

さらに慔然とした顔になる明日香だった。

「幽霊で。ここから離れられないのに」

「じゃあ今フリーかよ」

政之は急にそこを言うのだった。

「あんた彼氏いないんだな」

「当然でしょ。ここから離れられないんだし」

明日香は少し俯いて口を波線にさせて言うのだった。

「死ぬ前までいたけれど」

「だよな。それじゃあ」

政之はそこまで聞いて笑う。思わせぶりな笑みで明日香を見るの
だった。

「俺なんかどう？」

「どうって？」

「だから。一緒に住むんだしどうせなら付き合った方がいいじゃな
いか」

「何でそうなるのよ」

「まあまあ」

そう言いながら立ち上がる。そうして明日香の肩に手を触れると。
実感があつた。

「何だ、触れるんだ」

「触ろうと思えばね」

明日香は答えた。

「身体を暖めることだってできるし」

「幽霊っていうのも便利なんだな」

「けれど。どういうことよ」

意外と小柄だった。明日香は政之を見上げて問い返す。

「付き合うつて」

「だから言っただまだよ」

政之は自分の両手を明日香の両肩に置いてまた言う。

「じゃあ俺じゃ駄目かい？」

「性格は好きになれそうにないけれど」

それは今のところは気にしないことにした。

「顔はね。悪くないし」

「そうそう、男は顔だよ」

政之はまた己の問題のある性格を見せるのだった。

「だったらそれで決まりだよな。それじゃあ早速」

「早速って!？」

「ベッド行こうぜ、ベッド」

「ベッドってまさか」

これはすぐにわかった。明日香も知らないわけじゃない。

「あんた、もう!？」

「付き合っただったらいじゃないか」

明日香を半ば強制的にベッドの方に連れて行って言う。

「だろ?それじゃあ」

「あんたってこれまでの彼女にもそうだったの?」

「そうだよ」

「ここでも平気な顔であつた。」

「悪いか?」

「嫌な性格してるわよね、本当に」

「よく言われるさ。それで駄目なのか?」

「駄目じゃないけれど」

ここまで強引だと逆らうことができなかった。明日香としても観念するしかなかった。そうさせるのもまた政之の悪い意味での技量であつた。

「わかつたわよ。行きましょう」

「じゃあ付き合つんだよな」

「私に拒否権ないんでしょ？」

「あると思うのか？」

やはり性格が悪い男だつた。

「ここまで来て」

「そんなのだから嫌われるのよ」

「嫌われても平気だな」

「ここでもこう言う。」

「何を今更」

「本当に性格が悪いのね」

「毎日みたいに言われてるさ」

「だからこそ平気だつた。」

「まあそれで堪える奴はそもそも芯が細いんだよ」

「あんたに限つてそれはないみたいね」

「全然。言う奴には言わせとけばいいんだ」

それが彼の考えであつた。

「違うのか？」

「実際にそんなこと言つた人はじめてだわ」

明日香もこれには呆れた。

「ある意味尊敬に値するわ」

「じゃあ尊敬してくれ」

そう言つて明日香をベッドに座らせた。彼はその前にいる。

「いいよな、これから」

「断ることできないんでしょ？」

明日香は少し憚然とした顔で政之に言つた。

第四章

「違つかしら」

「俺は他人が俺の言葉を断ることは嫌いなんだ」

「やっぱりね」

もうわかっていた。今までの彼との会話で。

「じゃあいいわ。どのみちこれからずっと一緒だし」

「そういうこと。じゃあいいよな」

「ええ」

政之の言葉に観念して頷く。その時に。

政之が自分の目を覗き込んでいるのがわかった。じつと目の中を見ている。その目を見ていると。もう明日香は動けなかった。

動けないままベッドに倒されてそれから言うまでもなかった。

それが終わってから明日香はベッドから身体を起こして下着とシャツだけは着るのであった。

「服はそうやって着るんだな」

横に寝ている政之が彼女に声をかけてきた。彼はベッドの上に両手を枕にして仰向けに寝ながら煙草を吸っていた。そうして彼女に声をかけてきたのだ。

「幽霊でも」

「それは同じよ」

明日香は政之に顔を向けて答えた。

「だって。身体の構造は同じなんだから」

「魔法か何かで着たりはしないんだな」

「幽霊は魔法は使えないわよ」

そういうことであった。

「だって死んだだけで普通の人間と変わらないんだから」

「そうか。それに」

政之はまた明日香に言う。

「何か全然生きている女の子と変わらないな」

「悪い？」

「いや、全然」

それはいいと言うのだった。

「かえって安心したさ。普通だったしな」

「どんなのだと思っていたのよ」

「てっきり何か起こるかと思っていていたんだ」

政之の返答は明日香にとっては噴飯ものだった。実際にその言葉を聞いて顔を顰めさせる。

「どういうこと、それって」

「おどろおどろしい音楽が出て来るとか人魂とかな。それは全然なかったな」

「あるわけないでしょ。何よ、それ」

「幽霊でも全然同じか。安心したよ」

「当然でしょ。ただ死んだだけなんだし」

また抗議する。すると政之はまた言ってきた。

「ああ。それに」

「今度は何よ」

「さっきだけれどな」

「さっきって？」

「俺が目を覗き込んだ時だよ」

その時のことを言ってきた。明日香はその時のことを思い出した無意識のうちに顔を赤らめさせるのであった。

「えっ、その時って」

「動き止まってたよな」

明日香に目を向けて笑ってきた。まるで彼女の心を見透かしているように。

「そうだろ。あれで」

「わかってたの」

「わかるさ。いつもそうやって女の子落としてるからな」

「幽霊だつてね」

明日香は政之のその全部見透かしたような言葉に観念して言うのだった。

「女の子よ。ああいうことされたら」

「弱いつてか」

「そうよ。あれは反則よ」

政之から顔を背けて言う。やはりここでも顔は赤い。

「あんなことされたら誰だつて。女の子だつたら」

「だよな。けれど何もかもわかつたし」

政之はまだ笑っている。そのよこしまな笑顔で言うのだった。

「これから宜しくな」

「ええ」

明日香もまだ不本意ながら彼の言葉に頷いた。

「これからね。浮気したら祟るから」

「ああ、それだけはないな」

政之はそれに関しては安心するようにつのだった。

「俺は付き合う相手は一人って決めてるからな」

「嘘でしょ」

「いや、本当さ」

何か白々しさが感じられる調子で答えてきた。

「何なら確かめてみるかい？」

「ゆっくりとね」

明日香は何故かここではそれを深く追求しないのであった。そうしてこの言葉を出すのだった。

「それは確かめさせてもらうわ」

「じゃあこれからゆっくりと」

また明日香の方を見てきた。今度は顔を向けてきている。

「宜しくな」

「ええ」

一組の奇妙なカップルのはじまりであった。何はともあれ明日香

は政之と付き合うことになった。幽霊とはいえ女の子だ。どんな相手でも彼氏がいても不思議ではないのだった。

「けれどね」

その夜明日香は政之にまた言っていた。今度は二人はキッチンにいる。

「その料理の仕方はないでしょ」

「何がだよ」

政之が料理をしていた。料理をしながら明日香に問うていた。

「幽霊は別に何も食べないんだろ。だったらいいじゃないか」

「それでもよ。何それ」

丁度鶏肉を焼いている。チキンステーキだ。

「その胡椒の量は」

見れば胡椒を浴びせるように肉にかけている。それで肉が真っ黒になっていた。明日香はそれを見て政之に言っているのだ。

「こうじゃなきゃ美味くないんだよ」

「駄目よ、そんなの」

明日香は政之に抗議する。

「それじゃあお肉の味が」

「食わないからいいだろ」

そんな話をしながら料理を作って見る二人であった。何だかんだでもうカップルになっているのであった。明日香もやはり女の子であった。

幽霊でも女の子 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7658d/>

幽霊でも女の子

2010年10月8日15時41分発行